

男子体操競技情報 21 号 (改訂版)

(公財) 日本体操協会
リオデジャネイロオリンピック男子体操競技強化本部
審判委員会男子体操競技審判本部

2014 年 3 月 17 日付で FIG 男子技術委員会により新たな情報(Newsletter #27)が発表されたことを受け、男子体操競技情報 21 号の内容を一部変更し(変更部分赤字表示)、改訂版として通達します。

この情報は、国内において 2014 年 5 月 1 日から適用いたします。

【目 次】

1	はじめに	1
2	第 44 回世界体操競技選手権アントワープ大会報告	2
3	平成 25 年度国内大会報告	10
4	2013 年版採点規則正誤表	13
5	2014 年度採点指針、FIG 通達	14
6	2014 年度国内内規	28
7	おわりに	28

1 はじめに

リオデジャネイロオリンピック男子体操競技強化本部
男子体操競技強化本部長 水鳥 寿思

2013 年第 44 回世界体操競技選手権アントワープ大会において内村航平選手が史上初の世界選手権 4 連覇の快挙を達成しました。また、男子選手団は全体で金メダル 4 個、銀メダルを 1 個、銅メダル 2 個を獲得し、体操日本の強さが際立った一年となりました。選手の頑張りと言うまでもありませんが、それを支える全ての人々の力で勝ち取った成績だと感じております。日本の美しい体操が評価されたこと、個人総合に加えて種目別の強化が進んでいることは、リオデジャネイロオリンピック金メダル獲得に向けて非常に大きな 1 歩となりました。また、2020 年東京オリンピック開催決定も大きな追い風となりました。私たちはこの追い風に乗って、さらなる高みを目指していかなくてはなりません。2014 年に目を向けると、世界選手権南寧大会において団体総合での金メダル獲得が大きな目標となります。これらの目標を達成するためには、完成度の高い演技、特に得意種目の D スコア向上を両立させた強化を引き続き行っていくべきと考えています。

本情報 21 号では、主要大会の報告と共に、2014 年度の採点指針および FIG 通達が記載されています。諸情報を共有し、「体操ニッポン」のさらなる飛躍に向け努力して行きましょう。

本情報が、全ての「体操ニッポン」の育成・強化・審判に携わる関係者、選手の皆さんと共に共有、活用され、日本の競技力の向上につながる指針となるようにと考えます。皆様方のご協力をお願い申し上げます。

2 第44回世界体操競技選手権アントワープ大会報告

審判委員会男子体操競技審判本部
後藤 洋一

1. 派遣期間：2013年9月25日(水)～10月8日(火)
2. 開催地：ベルギー、アントワープ
3. 会場：Antwerp Sportpale
4. 審判員：竹内 輝明 (審判委員会委員長)
後藤 洋一 (男子体操競技審判本部本部長)
5. 日程：

9月	25日	(水)	出国
	26日	(木)	男子審判会議
	27日	(金)	男子ポディウムトレーニング
	28日	(土)	男女ポディウムトレーニング
	29日	(日)	女子ポディウムトレーニング
	30日	(月)	男子予選1～3班
10月	1日	(火)	男子予選4班 女子予選1～3班
	2日	(水)	女子予選4～5班
	3日	(木)	男子個人総合決勝
	4日	(金)	女子個人総合決勝
	5日	(土)	種目別決勝 男子 Fx、PH、SR 女子 VT、UB
	6日	(日)	種目別決勝 男子 VT、PB、HB 女子 BB、Fx
	7日	(月)	出国
	8日	(火)	帰国

6. 参加国：71カ国 (259名)
6種目エントリー：79名(44か国)
ゆか：137名 あん馬：149名 つり輪：136名
跳馬：122名 平行棒：142名 鉄棒：135名 跳馬2跳越：44名

7. 審判会議報告

□ 一般条項

- ・ 着地の際の減点は、最大-1.00 (3 steps and fall≠-1.30)
- ・ ゆかのウォーミングアップの際、10cm厚のエキストラマットの使用可
- ・ 平行棒の跳躍版は、ソフトタイプを使用

□ ゆか

- ・ 演技時間の終了は着地で足が揃った瞬間、転倒した場合は起き上がって足を揃えた時点で終了とする
- ・ 脚が水平位から30°逸脱した脚上挙支持は、マンナとして判定し角度の減点
- ・ 低い着地姿勢からとんだように伏せる捌きは-0.50

□ あん馬

- ・ 単純な片足振動技においても振幅の大きさに減点
- ・ 交差倒立での腰まがりは、力の使用の減点もあり
- ・ 縦向き移動の向き <15° 減点なし <30° -0.10 31° < -0.30

□ つり輪

- ・ ホンマ支持から脚前挙支持-0.30
- ・ 開脚前挙支持から脚前挙支持-0.30
- ・ ケーブルの揺れは、1 技につき-0.10(静止技の際、1 技で 2 往復しても-0.10)
- ・ 静止時間の減点、脚前挙支持や倒立(ほん転倒立等含む)についても 2 秒未満は-0.30
- ・ ゆっくりと後転中水平支持の速すぎる捌き-0.30
- ・ 角度の減点(開脚水平支持、中水平支持の腰まがり $16^{\circ} <$ -0.30)
- ・ 脚上挙十字懸垂の脚部が垂直でない場合は角度の減点

□ 跳馬

- ・ 第 1 局面の脚開き、膝のまがり
- ・ 第 2 局面の姿勢(宙返りの脚開き、つま先)

□ 平行棒

- ・ チップルトの振り下ろしでの膝のまがり減点
- ・ 棒下宙返り倒立の肘のまがり力の使用の減点もあり
- ・ バブサーの懸垂時の姿勢は、身体が水平で減点なし、角度の減点は一般条項通り
- ・ 宙返り腕支持の握り(キャッチ)が遅い捌きは減点の対象

□ 鉄棒

- ・ ヤマワキでの腰のまがり姿勢欠点の対象となる
- ・ ツォ・リミンは、明確な 1 回ひねりを示す。ひねり不足の減点 $<30^{\circ}$ -0.10
 $<60^{\circ}$ -0.30 $<90^{\circ}$ -0.50 $90^{\circ} <$ -0.50+難度不認定(片手車輪の B)
- ・ ひねり系の技の角度減点 $<15^{\circ}$ 減点なし(クースト、アドラー)
- ・ ひねり系の技の角度減点 $<30^{\circ}$ 減点なし(ひねって大逆手、片大逆手)

□ その他

予選競技当日の審判打ち合わせにおいて、D-Score に対する質問は、D 審判に直接するのではなくアリーナ内に設置された Desk に書面を提出することとなった。また、提出に当たっては次の演技者の得点が表示されるまでの間にとの説明があった。

8. 新技申請

※以下は、大会にて大欠点なく実施され技名に発表者の名前が認定された技

□ ゆか

- ・ 後方宙返り 4 回ひねり : F 難度(III) シライーグエン
⇒Kenzo SHIRAI (JPN) /Tuan Dat NGUYEN(VIE)
- ・ 前方宙返り 3 回ひねり : F 難度(II) シライ 2
⇒Kenzo SHIRAI (JPN)
*以上、採点規則に記載されているが未発表のため

□ あん馬

- ・ 正交差ひねり倒立横移動しながらひねり開脚支持 : C 難度(I) ステパンヤン
⇒Vahaggan STEPANYAN(ARM)
- ・ 縦向き 1/3 前移動直ちに 2/3 縦向き移動ひねり : D 難度(III) ニンレイズ
⇒Andrys NIN REYES(DOM)
*縦向き 3/3 移動は一演技中 2 回までの条項に抵触

□ つり輪

- ・ 背面水平懸垂経過伸腕伸身引き上げ上向き中水平支持(2 秒) : F 難度(IV) ザフラン
⇒Ali Ramadan Abuolkassem ZHRAN(EGY)

- ・ 背面水平懸垂から引き上げ水平支持(2秒) : F 難度(IV) ザネッティ
⇒Arthur ZANETTI(BRA)
*IV-72 と同一枠
- ・ リーニン2直接脚上挙十字懸垂(2秒) : E 難度(III) ツカハラ
⇒Naoya TSUKAHARA(AUS)
- ・ 後ろ振り上がり脚上挙十字懸垂(2秒) : D 難度(III) カトウ
⇒Ryohei KATO(JPN)
- ・ 伸腕伸身逆上がり脚上挙十字懸垂(2秒) : E 難度(IV) タイ
⇒Wei An Terry TAY (SIN)
- ・ 懸垂から伸腕伸身水平支持(2秒) : E 難度(IV) バランディン3
⇒Aleksandr BALANDIN(RUS)
*IV-53(Balandin1)と同一枠

□ 跳馬

- ・ 伸身ユルチェンコとび3回ひねり : 6.0 シライ/キム・ヒフン
⇒Kenzo SHIRAI (JPN) Hee Hoon KIM (KOR)

□ 鉄棒

- ・ 順手背面懸垂前振り上がり後方浮腰回転倒立(ケステ)ひねり大逆手 : D 難度(IV)
リホビツキー
⇒Andrey LIKHOVITSKIY(BLR)

9. 審判団と審判抽選

◆ D 審判団 (予選、決勝と同一者が担当)

Fx	D1 : Dong Jian Guo (CHN)	D2 : Topi TASKINEIN (FIN)
PH	D1 : Dimitry ANDREEV (RUS)	D2 : Vincent REIMERING (NED)
SR	D1 : Paul SZYJIKO (AUS)	D2 : Andrey FEDARAU (BLR)
VT	D1 : Juan Pablo RAMIREZCARMONA (COL)	D2 : Gareth Paul BRETTELL (NZL)
PB	D1 : Mircea Dumitru APOLZAN (ROU)	D2 : Jean Francois BLANQUINO (FRA)
HB	D1 : Lubos RUPCIK (SVK)	D2 : Benjamin BANGO (ESP)

◆ Reference Judges

Name	Country	Cat.	I	II	III
Mario VUKOJA	CRO	I	HB	HB	SR
Alejandro SAGRERAS	ARG	I	VT	HB	PH
Dejan Dejanovic	SRB	I	HB	SR	VT
Istvan BERCI	HUN	II	VT	PH	PB
Zdravko KURTEV	BUL	II	Fx	PB	HB
Fulvio TRAVERSO	ITA	II	PH	VT	PB
Josef TOTH	AUT	II	Fx	SR	PH
Viktoras SUPRIKAS	LTU	II	SR	Fx	Fx
Jan Hendrik Janse Van VUUREN	RSA	II	SR	PB	SR
Nikolaos PROVIAS	GRE	II	PB	VT	HB
LEE Yoon Chul	KOR	II	PB	Fx	Fx

◆ 抽選結果 後藤 洋一 個人総合決勝 跳馬 E3

10. 結果

□ 予選

個人総合	内村 航平	1位	91.924	予選通過
	加藤 凌平	3位	89.474	予選通過
ゆか	白井 健三	1位	16.233	予選通過
	内村 航平	3位	15.333	予選通過
	加藤 凌平	15位	14.933	
あん馬	亀山 耕平	8位	15.400	予選通過
	内村 航平	10位	15.133	リザーブ 2
	加藤 凌平	21位	14.600	
つり輪	山室 光史	8位	15.500	予選通過
	内村 航平	17位	15.000	
	加藤 凌平	22位	14.700	
跳馬	白井 健三	6位	14.916	予選通過
平行棒	内村 航平	10位	15.400	予選通過
	加藤 凌平	12位	15.400	リザーブ 2
	田中 和仁	75位	13.600	
鉄棒	内村 航平	1位	15.658	予選通過
	加藤 凌平	7位	15.075	予選通過
	山室 光史	27位	14.466	

□ 決勝

個人総合	内村 航平	1位	91.990	金メダル
	加藤 凌平	2位	90.032	銀メダル
ゆか	白井 健三	1位	16.000	金メダル
	内村 航平	3位	15.500	銅メダル
あん馬	亀山 耕平	1位	15.833	金メダル
つり輪	山室 光史	7位	15.433	
跳馬	白井 健三	4位	15.133	
平行棒	内村 航平	1位	15.666	金メダル
鉄棒	内村 航平	3位	15.633	銅メダル
	加藤 凌平	7位	15.025	

11. 所感

個人総合では、予選決勝と6種目をミスすることなく演技を遂行する日本選手の力が際立ち、あらためてその競技力の高さを知らしめた。内村選手はE-Scoreの6種目合計は24選手中でトップとなる53.890であった。2位になった加藤選手においても予選から全種目を通して安定した演技であり、E-Scoreの6種目合計も内村選手につぐ52.632であった。

3種目終了時点で2位から8位までが1点以内の僅差であり、銅メダルとなったHambuechen選手(GER)は加藤選手に1.166差の13位であった。4種目めでVerniaev選手(UKR)、Belyavskiy選手(RUS)、Lin Chao Pan選手(CHN)といった上位の可能性のある選手がミスを出し脱落していった。Hambuechen選手は5種目めの鉄棒で予選よりD-Scoreを高めた構成を成功させ4位まで順位を上げ、さらに6種目めのゆかで15点台をマークした。一方、1種目めから3位以内をキープしていたMikulak選手(USA)は鉄棒でミスを出し、最終種目で6位まで順位を下げてしまった。

これにより Hambuechen 選手が 3 位に浮上する結果となった。

9 月上旬に開催された中国国内大会で個人総合 1、2 位となった中国の 2 選手は予選ではまずまずの得点を獲得していたが決勝では精彩を欠いた。Zhou 選手の予選での D-Score(6 種目合計)は、38.0 と内村選手の合計 38.1 とほぼ同じであった。つり輪で認定されなかった力技(最大 6.4 の可能性あり)を考えると、D-Score で内村選手を上回ることとなり今後注目しておく必要があると考えられる。また、ブラジルの Sasaki Jr. 選手も D-Score の 6 種目合計は内村選手と同じ 38.1 であった(E-Score は 50.849)。3 年後の地元開催の五輪を考えるとメダル圏内の可能性を秘めている。D-Score の 6 種目合計のトップは、Verniaev 選手(UKR)の 38.7 であった。

種目別決勝では、技や演技構成について規則改訂後の新たな試みがいくつか見られた。

ゆかでは、宙返りの連続の中に前方 2 回宙返り(後ろとびひねりを含む)を実施する選手が散見された。コイル式スプリングバネを使用したゆかフロアの普及によりさらに演技は多様化すると予想される。

- Legendre (USA) 前方宙返り 2 回ひねり～前方かかえ込み 2 回宙返り : D+D
- Hypolito (BRA) 後ろとびひねり前方かかえ込み 2 回宙返り～前方宙返り 1 回ひねり : D+C
- Sasaki Jr. (BRA) 前方屈身 2 回宙返り～前方宙返りひねり : E+B
後方宙返り 3/2 ひねり～前方かかえ込み 2 回宙返り : C+D

あん馬では、ブスナリに代表される旋回倒立から振り下ろして旋回で格上げを目指す選手がいた。Busnari 選手 (ITA) は 1 演技中に 3 種類の旋回倒立系を実施した。しかし、倒立にあげる際や移動ひねりのスピード、下ろして回す際の力の使用などに厳密に対処してほしいとのコメントがなされた。結果として D-Score がアップする以上の減点を伴う可能性も大きい技となった。

- Busnari (ITA) dsA 倒立 1 回ひねり下ろして旋回 : F
旋回倒立 1 回ひねり 3 部分移動下ろして旋回 : F
dsA 倒立 1 回ひねり 3 部分移動下ろして旋回 : G
- Whitlock (GBR) dsA 倒立 1 回ひねり 3 部分移動下ろして旋回 : G

つり輪では、力技の連続に規制が課せられたが、大きな影響はみられなかった。種目別決勝においては姿勢と時間の正確さ、さらに力強さの表現といった従来通りの採点傾向であった。種目別決勝で Wynn 選手(USA)の D-Score に対して文書による質問が提出されたが却下された。脚前拳十字懸垂から引き上げて十字倒立を D 難度で判定されたことによる質問であったが、伸身姿勢が不明確であったとの回答であった。予選では同様の捌きであったが E 難度で判定されていた。

跳馬では、五輪チャンピオンの Yan 選手 (KOR) が貫録の優勝であった。新技申請で伸身カサマツとび 5/2 ひねりを申請したが発表されなかった。E-Score に関してはローチェタイプの技に対し従来通りのシビアな採点であった。高さと余裕のあるローチェやドラグレスクであっても脚開きなどのチェックがしっかりとされ、9.3 以上は出にくい傾向であった。

平行棒では、棒下宙返り単棒倒立(シャルロ)や懸垂前振り開脚抜き懸垂(バブサー)の実施が増加したように感じた。シャルロは単棒倒立の処理で失敗をする選手も散見された。バブサーについては審判会議で懸垂時の姿勢について言及があった。終末技については前方系が優遇される難度設定となったが増えているという印象は受けなかった。しかし、中国の Zhou 選手の前方かかえ込み宙返りひねり後方宙返り下りの捌きは非常に素晴らしかった。

鉄棒では、例年の大会のように予選から決勝にかけて D-Score を高めて勝負をする傾向であった。優勝した Zonderland 選手 (NED) もその一人であり、決勝ではカッシーナ～コバチ : G+D、コールマン～屈身ゲイロード 2 : F+E を成功させた。確かにすごいという表現に見合う演技構成ではあるが実施面を考えると Hambuechen 選手 (GER) の方が上位にあってもいいような印象を受けた。

全体を通して五輪の翌年で規則改訂後の最初の年ということもあり、各国がどのような新チームを組むのか技の動向がどう変わるか、ユニバーシアードで好成績を収めたロシアや新戦力が出場している中国、また 3 年後に五輪を控えているブラジルの動向に注目が集まった。

日本は金メダル4個、銀メダル1個、銅メダル2個を獲得し6名の参加選手中5名が決勝進出し4名がメダリストとなる素晴らしい結果であった。一方、ユニバーシアードで活躍し期待されていたロシアと若手の台頭が予想された中国は、好結果につながらなかった。ロシアに関してはユニバーシアード大会に照準を合わせたかのような失速、中国は東アジア競技会に精力を注ぎきったような覇気の無さを感じた。中国は、東アジアの成績も含めさらに詳細な分析の必要があろう。ロンドン五輪で団体3位になったイギリスは、Keating選手、Purvis選手に加えWhitlock選手が安定した力を示し始めていた。アメリカは、Mikulak選手、Orozco選手(共に1992年生まれ)と若手が中心である。D-Scoreの総計は、日本：114.9に対しアメリカ：108.9であった。日本は予選に18種目(6種目×3選手)エントリーしたがアメリカは17種目であった(鉄棒のみ2選手)。平均すると日本：6.383に対しアメリカ：6.406と日本を上回る数値であった。平行棒では内村選手が金を獲得したが、予選ではアメリカの3選手とも内村選手より上位にランクされた。出場した選手も失敗が少なくE-Scoreにおいても相応に評価されていたことから団体戦ではアメリカは中国とともに日本と接戦になると予想される。

日本選手は、内村選手を筆頭に高いE-Scoreを獲得した。演技の安定感、体線の美しさはこれまでの競技会報告の通りであり、戦略的方向性が間違っていないことが確信できた。反面、世界大会のような大きな会場では躍動感を伴ったパワーを発揮する選手にも視線が注がれた。今回は失敗により上位に入らなかったが、Velyniaev(UKR)、Belyavskiy(RUS)やSasaki Jr(BRA)のように脚力のある選手たちである。日本国内ではこのようなタイプの選手を選出しにくい傾向があるかもしれないが、今後、パワーや力強さを放つ存在感という観点にも注目していく必要がある。

◆ 個人総合決勝 D-Score 上位選手

Rk	氏名	国名	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total	順
1	Velyniaev	UKR	6.5	6.7	6.4	6.0	6.8	6.3	38.7	15
2	内村航平	日本	6.4	6.2	6.2	6.0	6.4	6.9	38.1	1
3	Sasaki Jr. Sergio	BRA	6.7	6.3	6.0	6.0	6.3	6.8	38.1	5
4	Zhou Shixiong	中国	6.5	5.7	6.1	5.6	7.0	6.8	37.7	10
5	Lin Chaopan	中国	6.1	6.1	5.9	6.0	6.7	6.7	37.5	9
6	加藤凌平	日本	6.7	6.2	6.0	5.6	6.5	6.4	37.4	2
7	Belyavskiy	RUS	6.4	6.4	5.9	6.0	6.6	6.0	37.3	12
8	Hambuechen	GER	6.3	5.3	5.9	5.6	6.6	7.4	37.1	3
9	Whitlock Max	GBR	6.6	7.2	5.5	5.6	6.0	6.2	37.1	4
10	Purvis Daniel	GBR	6.5	6.2	5.9	5.6	6.5	5.9	36.6	7
11	Mikulak Samuel	USA	6.2	5.9	6.0	5.6	6.2	6.5	36.4	6

◆ 個人総合決勝 E-Score 上位選手

Rk	氏名	国名	FX	PH	SR	VT	PB	HB	Total	順
1	内村航平	日本	9.158	8.933	8.900	9.333	8.933	8.633	53.890	1
2	加藤凌平	日本	8.800	8.400	8.666	9.200	8.800	8.766	52.632	2
3	Hambuechen	GER	8.833	8.033	8.900	9.300	8.633	8.533	52.232	3
4	Mikulak Samuel	USA	9.166	8.708	8.775	9.233	9.000	7.266	52.148	6
5	Likhovitskiy A	BLR	8.666	8.400	8.566	9.033	9.058	8.400	52.123	8
6	Whitlock Max	GBR	8.666	8.433	8.766	9.133	8.533	8.400	51.931	4

7	Purvis Daniel	GBR	8.633	8.133	8.441	9.433	8.500	8.366	51.506	7
8	Schmidt Casimir	NED	8.700	7.400	8.708	9.133	8.666	8.400	51.007	18

◆ メダル獲得国

	個人総合	ゆ か	あん馬	つり輪	跳 馬	平行棒	鉄 棒
1位	日本	日本	日本	BRA	KOR	日本	NED
2位	日本	USA	GBR	RUS	USA	CHN	GER
3位	GER	日本	MEX	USA	GBR	USA	日本

◆ 各国のメダル獲得個数

	金	銀	銅
日本	4	1	2
ブラジル	1		
韓国	1		
オランダ	1		
中国	1		

	金	銀	銅
アメリカ		2	2
イギリス		1	1
ドイツ		1	1
ロシア		1	
メキシコ		1	

12. 種目別メダル獲得者演技構成

□ ゆ か

1位 白井健三(日本) 16.000 D:7.4 E:8.600

後方宙返り 7/2 ひねり～前方宙返り 2/1 ひねり(E+D)、前方宙返り 1/1 ひねり～前方宙返り 3/1 ひねり(C+F)、テンポ～後方宙返り 3/1 ひねり(B+D)、脚上挙支持から伸腕屈身力倒立(C)、後方宙返り 5/2 ひねり～前方宙返り 5/2 ひねり(D+E)、側方宙返り 1/1 ひねり(C)、後方宙返り 4/1 ひねり(F)

2位 Dalton Jacob(USA) 15.600 D:6.8 E:8.800

後ろとびひねり前方伸身 2 回宙返り(F タマヨ)、テンポ～後ろとびひねり前方屈身 2 回宙返り(B+E)、後方宙返り 3/2 ひねり～前方宙返り 2/1 ひねり(C+D)、十字倒立(C)、後方宙返り 5/2 ひねり～前方宙返り 1/1 ひねり(D+C)、伸身トーマス(E)、後方宙返り 3/1 ひねり (D)

3位 内村航平(日本) 15.500 D:6.4 E:9.100

後方宙返り 3/2 ひねり～前方宙返り 5/2 ひねり(C+E)、前方宙返り 1/1 ひねり～前方宙返り 2/1 ひねり(C+D)、後方宙返り 5/2 ひねり～前方宙返り 3/2 ひねり(D+C)、後方宙返り 2/1 ひねり(C)、フェドルチェンコ(C)、トーマス(D)、後方宙返り 3/1 ひねり(D)

□ あん馬

1位 亀山耕平(日本) 15.833 D:6.9 E:8.933

逆交差倒立(D)、正交差倒立(D)、フロップ(E)、コンバイン(E)、把手間ロシアン 1080° (E)、縦向き前移動 3/3(D)、縦向き後移動 3/3(D)、縦向きシュピンドル(D)、ウ・グォニアン(E)、dsA 倒立 3/3 移動下り(D)

2位 Whitlock Max (GBR) 15.633 D:7.2 E:8.433

正交差移動ひねり逆交差入れ(C)、コンバイン(G)、フロップ(E)、dsA 倒立 3/3 移動 360° ひねり下ろして開脚旋回(Gブスナリ)、シュピンドル(D)、縦向き前移動 3/3(D)、縦向き後移動 3/3(D)、ウ・グォニアン(E)、ロシアン 1080° (D)、dsA 倒立 3/3 移動下り(D)

2位 Corral BARRON Daniel(MEX) 15.633 D:6.8 E:8.833

逆交差倒立(D)、正交差倒立(D)、フロップ(E)、コンバイン(D)、縦向きシュピンドル(D)、ウ・

グオニアン(E)、ロシアン 1080° (D)、縦向き前移動 3/3(D)、縦向き後移動 3/3(D)、dsA 倒立 3/3 移動下り(D)

□ つり輪

1位 Nabarrete Zanetti Arthur(BRA) 15.800 D:6.8 E:9.000

ゆっくりと伸腕伸身逆上がり水平支持(E)、背面水平懸垂から引き上げ中水平支持(F)、ほん転倒立(C)、後ろ振り上がり水平支持(D)、ゆっくりと伸腕伸身逆上がり中水平支持(F)、ナカヤマ(D)、屈身ヤマワキ(D)、ホンマ十字懸垂(D)、後ろ振り上がり倒立(C)、後方伸身 2 回宙返り 1/1 ひねり下り(D)

2位 Balandin Aleksandr(RUS) 15.733 D:6.9 E:8.833

懸垂から伸腕伸身十字倒立(E バランディン)、ゆっくりと伸腕伸身逆上がり中水平支持(F)、懸垂から伸腕伸身中水平支持(E バランディン)、屈身ヤマワキ(D)、後ろ振り上がり中水平支持(E)、ナカヤマ(D)、ヤマワキ、ホンマ十字懸垂(D)、後ろ振り上がり水平支持(D)、ほん転倒立(C)、後方伸身 2 回宙返り 1/1 ひねり下り(D)

3位 Wynn Brandon(USA) 15.666 D:6.7 E:8.966

正面水平経過脚前挙十字懸垂(D)、伸腕屈身力十字倒立(D)、後ろ振り上がり十字倒立(D)、屈身ヤマワキ(D)、後ろ振り上がり水平支持(D)、ゆっくりと伸腕伸身逆上がり中水平支持(F)、前振り上がり脚前挙支持、前に回りながら懸垂、後ろ振り上がり中水平支持(E)、ナカヤマ(D)、後ろ振り上がり倒立(C)、後方車輪、後方伸身 2 回宙返り 1/1 ひねり下り(D)

□ 跳馬

1位 Yang Hak Seon(KOR) 15.533

前転とび前方伸身宙返り 3/1 ひねり (ヤンハクソン) 15.733 D:6.4 E:9.333

伸身カサマツとび 2/1 ひねり (ロペス) 15.333 D:6.0 E:9.333

2位 Legendr Steven(USA) 15.249

前転とび前方かかえ込み 2 回宙返りひねり (ドラグレスク) 15.266 D:6.0 E:9.266

側転とび後方屈身 2 回宙返り (ルーユーフ) 15.233 D:6.0 E:9.233

3位 Thomas Kristian(GBR) 15.233

側転とび後方屈身 2 回宙返り (ルーユーフ) 15.500 D:6.0 E:9.500

前転とび前方かかえ込み 2 回宙返り (ローチェ) 14.966 D:5.6 E:9.366

□ 平行棒

1位 内村航平(日本) 15.666 D:6.7 E:8.966

マクーツ(E)、ヒーリー(D)、ドミトリエンコ(E)、棒下宙返り倒立(D)、後方車輪倒立(C)、屈身ベーレ(E)、懸垂前振り後方かかえ込み宙返りひねり腕支持(D)、モリスエ(D)、前方開脚宙返り腕支持(D)、後方屈身 2 回宙返り下り(D)

1位 Lin Chaopan(CHN) 15.666 D:6.7 E:8.966

後ろ振り上がり前方屈身宙返り(D)、棒下宙返りひねり倒立(E)、棒下宙返り倒立(D)、車輪ディアミドフ(D)、屈身ベーレ(E)、前方開脚宙返り腕支持(D)、バブサー(E)、チップルト(D)、ヒーリー(D)、後方屈身 2 回宙返り下り(D)

3位 Orozco John (USA) 15.533 D: 6.8 E: 8.733

後ろ振り上がり前方宙返り支持(D)、ドミトリエンコ(E)、屈身モリスエ(E)、棒下宙返りひねり倒立(E)、棒下宙返り倒立(D)、懸垂前振り後方かかえ込み宙返りひねり腕支持(D)、前方開脚宙返り腕支持(D)、チップルト(D)、ヒーリー(D)、後方屈身 2 回宙返り下り(D)

□ 鉄 棒

1位 Zonderland Epke (NED) 16.000 D:7.7 E:8.300

エンドー1/1 ひねり大逆手(D)、カッシーナ～コバチ(G+D)、コールマン～ゲイロード2 (F+E)、アドラー1/1 ひねり (E)、アドラーひねり(D)、シュタルダーとび 3/2 ひねり大逆手(E)、後方とび車輪 1/1 ひねり(C)、後方伸身 2 回宙返り 2/1 ひねり下り(E)

2位 Hambuechen Fabian (GER) 15.933 D:7.4 E:8.533

カッシーナ(G)、コールマン(F)、伸身トカチェフ～リバルコ～ウインクラー(D+D+E)、シュタルダーとび 3/2 ひねり大逆手(E)、アドラー1/1 ひねり(D)、アドラーひねり(D)、後方とび車輪 1/1 ひねり(C)、後方伸身 2 回宙返り 2/1 ひねり下り(E)

3位 内村航平(日本) 15.633 D:6.9 E:8.733

カッシーナ(G)、シュタルダーとび 3/2 ひねり(D)、アドラーひねり～コールマン(D+F)、後方とび車輪 3/2 ひねり(C)、アドラー1/1 ひねり～ヤマワキ(D+D)、エンドー(B)、後方とび車輪 1/1 ひねり(C)、後方伸身 2 回宙返り 2/1 ひねり下り(E)

3 国内競技会（全日本個人総合・種目別・団体選手権、NHK 杯）総括

□ ゆ か

演技の採点指針として、「美しさの表現された演技」と「安定した着地」の実施に重点を置き、採点にあたった。「美しさの表現された演技」の面では、正しい姿勢で高さのある宙返りの実施を評価し、あいまいな姿勢での実施（かかえ込み、屈身、伸身が不明瞭、宙返りでの脚の開きなど）は減点の対象とした。「安定した着地」の面では、明確な着地の準備局面が見られ、高い着地姿勢がとられている実施を評価し、準備局面の見られない着地（ひねり技でのひねりながらの着地など）や、頭や上体の下がった着地は減点の対象とした。2013 年版採点規則から、「片手でゆかを支える」着地減点が 0.50 から 1.00 に変更されたことによって、今まで以上に 1 回の着地ミスが決定点に大きな影響を及ぼすようになった。着地でゆかを支える減点（転倒を含む）は全日本個人総合 6 件、NHK 杯 6 件、全日本種目別 6 件、全日本団体 8 件であった。また、今年度、多くの選手が「伸腕屈身力十字倒立（2 秒）」を実施したが、わずかながらでも足先で蹴り上げたり、振動を使って上げたりする実施や両手の開きが狭く頭の位置が高い実施、静止時間が短い実施が多く見られ、相応の減点をした。「側方宙返り 1 回ひねり」においては、明確な側方回転の見られない実施は後方系として判定した。

□ あん馬

D スコアを高めるために倒立位を経過する交差技が多く実施されたが、片足振動の技術を利用したの実施はごく少数であり、腰をまげて力を使用して上げる実施が目立った。また、倒立から振り下ろす際に、力を使ってゆっくりと正面支持になるなど、スピード感に欠ける実施に対しては相応の減点をした。単純な片足振動（入れ、抜き）においても大きさが要求されるが、亀山選手（徳洲会体操クラブ）は入れ足を振り上げてアピールする捌きには大変良い印象を受けた。

旋回技については、美しい体線や雄大な旋回を目指そうとする実施が増えてきた印象を受けた。一方、種目別選手権では落下等の過失が多く、安定感に欠ける印象を受けた。

なお、あん馬の難度認定で注意すべき点としては、マジヤールやシバドの移動技の途中で落下した場合、移動が完了したところまでの難度を認定するが、ウ・グォニアンは途中で落下した場合、部分的にも難度が認定されないケースの技がある。また、A 難度の単純な旋回技は「正面支持から正面支持」で難度認定となるという点である。演技を構成する上で、また D スコアへの問合せの際

に再度確認をしていただきたいと感じた。

□ つり輪

年度当初は新しい規則での競技であった上に、春先は選手の演技試行錯誤の状況だった事も相まって、減点の多い競技会が続いた。明らかな静止時間不足は勿論の事、2秒に達するか微妙な実施は説得力に欠け、得点が伸び悩む傾向にあった。しかし、シーズンが進むにつれて演技の実施が習熟し、年度後半の競技会では静止時間や着地への意識の高まりを感じた。全日本団体選手権においては、力強さをアピールするような演技実施が高い評価を受けていた。特に上位数名の選手は実施に磨きがかかり、丁寧な実施で力静止技の終末姿勢への収め、静止時間、着地を主に質の高い内容であった。力静止技は、実施する以上は十分な静止時間を最重要課題とされたい。その他目立つ減点項目として、深い握り手、グループⅢの技（特に中水平支持や十字倒立）の持ち込む際の角度と静止姿勢の二重の逸脱、リズム不良や強引さを感じるヤマワキ等の振動技の実施、着地の乱れ等が挙げられる。技の選択については、安易にDスコアを高めるのではなく、実施とのバランスを重要素とされたい。また着地への意識は継続的に持っていただきたい。

新たに難度設定された脚上挙十字懸垂とその複合技が増加傾向であったが、今後減点項目の明確化が予想されるので安易な難度獲得のための乱用に注意されたい。

□ 跳馬

採点規則が改訂され2013年版採点規則となり、得点上最も影響があったのは跳馬である。大半の跳越価値点が1.00低くなったために、前年度までのような高得点が望めなくなった。価値点が6.0の跳越を行い、着地を決めてようやく他の種目の上位と同等の得点が得られることになる。しかしながら6.0の跳越を実施した選手は4大会を通じて11名ほどであった。

この選手達には敬意を表したいが、実施の面ではまだまだ習熟度が低く、着地までコントロールされている演技は少なかった。次年度は6.0の跳越がもっと高い頻度で現れることはもちろん、高い完成度で見られることに期待したい。

< 4大会でのDスコア6.0の跳越技実施数 >

	全日本個人		NHK杯		全日本種目別		全日本団体	
	予選	決勝	予選	決勝	予選	決勝	予選	決勝
ドラグレスク	1				2		1	1
ヨーⅡ	2	1	2	1	3	4	1	1
ロペス	2	2	1	1	3	4	3	3
合計	5	3	3	2	8	8	5	5

※全日本種目別において、6.0の跳越技を2本実施した選手は予選2名、決勝3名であった。

□ 平行棒

Dスコア向上のために上位選手の多くが棒下宙返り倒立、チップルト、ベーレ、ヒーリー、前振り1/4ひねり単棒倒立といった技を中心に演技を構成している。終末技においてはD難度以上で後方屈身2回宙返り下り以外の終末技を実施したのは、小山選手（鹿屋体育大学）の前方かかえ込み2回宙返り下り（E難度）だけであった。棒上、棒下、懸垂、腕支持といったように平行棒は多様な空間のある種目であるのでさらに変化に富んだ構成を検討していただきたい。なお、マクーツ（E難度）を行ったのは内村選手（コナミ）だけである。

一方、実施においては、減点されずにEスコアを高めようとする意識を強く感じた。特に倒立

位への持ち込みやキメということに関しては全体的にも良い方向に推移している。握りかえにしても着地にしても意識されてきているのは演技の随所によく現れていた。ただし、個々の技の捌き方に関してはもう一工夫ほしい所である。宙返りから腕支持になる技での体の伸ばしや終末技での着地の先取り、C 難度の振動から倒立になる技でのキメ等々である。雄大性があり美しい空中局面を伴った技やリズムカルでキメのある技で人々を魅了させる演技をぜひ望みたい。

□ 鉄 棒

昨年度と比較して D スコアが目立って向上した印象はなかった。とりわけ、手放し技の連続については、植松選手（コナミ）1名という状況であった。予選競技会や団体戦といった緊張した中での演技のためリスクを負いにくかったのではないかと思われる。そのため、アドラー系からの手放し技が主流となり、鉄棒本来のダイナミックな演技構成を実施する選手が少なくなった印象が残った。カッシーナやコールマンといった高難度の手放し技を実施してもシュタルダーやエンドーといった B 難度も 9 技の技に数えなければならない演技構成があり、相対して D スコアの向上に繋がらない演技も散見された。

実施については、鉄棒が本来持つ醍醐味（手放し技や終末技の高さ）やしなやかさ（シュタルダーやエンドーの柔軟性を示す捌き）のある演技が少なかった。数年来の課題であるひねり技における終末姿勢の角度についてより高い位置で握ろうとする意識は感じられなかった。特に両大逆手になる技では小欠点程度の実施は少なく大半が中欠点となった。また、あふりの際の膝のまがり（ゆるみ）のない洗練された振動技術においても一層の取り組みを期待したい。

4 2013年版採点規則正誤表

日本語版 2013年版採点規則の誤植・追加等による訂正

ページ	訂正箇所	(誤)		(正)
p22	下から5行目	(ユース：8技)	⇒	(ジュニア：8技)
p26	下から1行目	(補足3参照)	⇒	(補足2参照)
p30	9-1条1.	(補足2参照)	⇒	(補足3参照)
p37	9-4条 E 審判の減点項目 倒立でぐらつく、または倒れる		⇒	小欠点0.1に+を追加
p113	IV-65 (バンゲルダー)		⇒	(2秒)を追加
p125	13-2条 Dスコア5	姿勢の定義は4部・3を参照	⇒	姿勢の定義は補足3を参照
p133	II-16 かかえ込みツカハラとび3/2ひねり かかえ込みカサマツとびひねり 3.0		⇒	4.0
p200	第4部 補足2.	(第7-4条 mを参照)	⇒	(第7-4条 kを参照)
p201	第4部 補足 3. i) iv	前転とび前方宙返り (グループIII)	⇒	(グループI)
p201	第4部 補足 3. i) iv	側転とび1/4ひねり前方宙返り (グループIV)	⇒	(グループII)
p201	第4部 補足4.	第5-2bと並んで	⇒	第5-1dと並んで

5 2014 年度採点指針および FIG 通達

● 2014 年度採点指針

□ 全体として

- ① 安定した演技実施を基盤に、高められた D スコアを有する演技
- ② 美しさ、力強さを表現した演技実施
- ③ 着地への準備局面を有し意識的に静止に持ち込められる終末技

□ ゆ か

- ① 雄大なタンブリングや正確なひねり技による先取りのある安定した着地
- ② グループ I の旋回技や力静止技において丁寧で美しさを表現する演技

□ あん馬

- ① 安定感があり、終末技までスピード感を保ちしなやかかつ十分に体を伸ばした旋回
- ② 倒立経過する旋回技や振動技において、スムーズに倒立位に持ち込める振動技術

□ つり輪

- ① 演技全体として力強さを表現した演技
- ② 倒立や静止技で正確な姿勢と時間

□ 跳 馬

- ① 雄大で準備局面を示した着地を有する跳越
- ② 安定感、確実性のある D スコア 6.0 以上の跳越技

□ 平行棒

- ① 倒立位を経過する振動技で角度減点の無い安定した実施
- ② 振幅の大きさや雄大な空中局面を示した実施

□ 鉄 棒

- ① 雄大な空中局面を示す安定した手放し技や終末技での実施
- ② 倒立位を経過する技、ひねりを伴う振動技での角度減点の少ない実施

● 難度認定及び演技実施の確認事項

(修正、変更箇所は赤字にて記載)

□ 一般条項

1. 採点規則 7-4 条 5k)により、90° を超えてひねりが少ない場合、低い難度で判定する。
2. 採点規則や本情報内で同一棒（同一番号）の技は同一技として判定される。ゲイロードと大逆手ゲイロードは同一棒（同一番号）であり、同一技となり出現順に一技のみカウントされる。ただし、同一棒内で「別技と判断する」、と記載された技は両技とも演技内で実施することができる。
3. 採点規則 p26 第 7-4 条 h)にある通り、落下した場合のみその技を繰り返すことができる。平行棒や鉄棒の振動技で 45° 以上の逸脱で難度が不認定となった場合、その技を繰り返すことはできない。

4. 終末技やゆかの宙返りの着地で転倒した場合、減点は最大 1.00 とする。
例) 3 歩動いて転倒 ≠ -1.30
5. 着地後、明らかに手や膝で支えるような場合、転倒 (-1.00) と判定する。
6. 終末技で着地姿勢が低い、または余裕のない着地は減点となる (-0.10、-0.30)。
7. ライン減点：片足が直接エリア外へ出て着地した後、もう一方の足 (または身体の他の部分) がさらに線外へ出た場合は、身体の二カ所が出たことに対して 0.30 の減点となる。ライン減点は、ゆかと跳馬で同じように適用する。
8. 短い演技に対する措置は E スコアの満点をすべて 10.00 とし、決定点からの減点 (ニュートラルディダクション) で対応する (第 8 章 8-1 条 3 項 採点規則 p29)。

7 技以上	減点なし
5~6 技	-4.00
3~4 技	-6.00
1~2 技	-8.00
0 技 (0.00 の場合).....		D スコア : 0.0 E スコア : 0.00

9. 服装違反の減点は、発覚した種目で 1 回のみ決定点から減点 (-0.30 : 国内対応) とする。審判長は、次の種目以降の D1 (主審) に伝達する。
10. オーダーミスは、発覚した最初の選手から 1 回のみ決定点から減点 (-0.30 : 国内対応) とする。
11. 採点規則第 3-4 条では D スコアへの質問は「1 分以内に」と記載されているが、国内対応としてローテーション内でも認める。最終演技者の場合、次のローテーションのウォームアップ内でも認める。
12. 難度表の●印は、FIG 制定の年齢によるジュニア競技会用の規則であり、国内ジュニア大会とは無関係である。
13. リファレンスジャッジシステムは、競技におけるさらなる採点の公平性を維持する目的で作成され、E スコアにおける問題発生の場合、自動的かつ短時間で訂正するシステムとして導入された。E 審判の採点と R 審判の採点に隔たりがあった場合、コンピュータ内で自動的に R 審判の得点が E スコアに反映するようにプログラム化されている。国内では採用しない。
14. 宙返りや終末技での着地において、安全上の理由により選手は脚を開いて着地をすることができる。その際、十分に踵を揃えられるだけの間隔でつま先を動かすことなく、踵を閉じて完了しなければならない。脚を開いた着地の減点は下記のとおりである。
 - ・わずかに脚を開いて着地し、つま先を浮かさず踵を閉じる.....減点なし
 - ・肩幅以内に脚を開いて着地し、脚を上げて踵を閉じる、または、脚を閉じない
.....-0.10
 - ・肩幅を越えて脚を開いて着地し、脚を上げて踵を閉じる、または、脚を閉じない
.....-0.30

※その他全ての実施減点 (宙返りの空中局面や着地準備等) も常に評価の対象となる。

15. 採点規則(p36)9-4 条 E 審判の減点項目

欠点	小欠点	中欠点	大欠点
ゆか、マット、または器械に触れる	+		

*中欠点から小欠点へ変更

この減点の対象は、平行棒の懸垂振動で足がゆかに触れた場合やあん馬の旋回技で脚が器械に触れた場合等が挙げられる。器械にぶつかる (-0.50) および、不安定な着地で手が触れる (-0.30) は、従来通りである。

□ ゆ か

1) 難度認定の確認事項

1. 両足旋回から続けられたロシアン転向技は、両足抜きの後の正面支持から転向度を数える。また、両足旋回を挟まないでロシアン転向技を実施した場合、最初の正面支持から転向度を数える。
2. すべての力倒立技は静止が必要であり、静止時間と技の認定に関してはより厳密に判定する。
3. 二つの力技で一つの難度を得る技において、片方に静止がみられなかった場合は、もう片方の低い難度のみを認定する。例えば、マンナ（1秒）から伸腕屈身力倒立（静止無し）を行った場合、マンナのC難度のみを認定する。
4. ~~I-44、I-45の倒立から伸膝前転（開）脚前挙支持経過倒立は、力技（演技中2回まで）に属さない。~~
⇒倒立前転開脚浮腰支持経過倒立（I-44）、倒立から伸膝前転脚前挙支持経過倒立（I-45）は力技に属する。



採点規則10-2条2.5.g（力技の制限）に抵触する技は、グループ I-01から I-48までとなる（I-19、I-31を除く）。

5. 連続された宙返り技の着地で瞬時のコントロールも示さずに臥せるような実施（-0.50）は、組合せ加点の対象としない。
6. ベスト10に含まれていない技でも、組合せ加点を与えることができる。
7. 繰り返し技やグループ内で4技を超えて削除された技との組み合わせは認定しない。
8. 「後ろとびひねり前方2回宙返りひねり」において、明確な前方宙返りが示されない場合はグループIVの技とは認定されず、グループIIIの後方2回宙返り1回ひねりと判定する。
9. 「後ろとびひねり前方宙返り」において、ひねるきっかけが遅く、後方宙返りひねりに見える場合はグループIIIと判定する。
10. 「側方宙返り1回ひねり」は、後ろとびの後に側方開脚姿勢を示してから1回ひねりをする捌きをグループIVで判定する。安全上の理由によりさらにひねりを加えることはできない。上記以外の捌きはグループIIIで判定する。
11. グループIV-37、43、44、45、46、50、51は、難度とグループを得るためには横向きで着地しなければならない。
12. ゆかにおいて、終末技はグループVの技として判定すると共にグループ（II、III、IV）内4技の一つとしてもとらえられる。終末技を含めて同一グループの技が5技以上あった場合、終末技を最初に数え、最も低い難度の技を除外する。
13. グループII、III、IVの技が終末技のみで実施された場合（その他では実施なし）、その技はグループVとみなされ、グループ（II、III、IV）としての0.50をDスコアに加算しない。
14. 終末技で、既に実施された技を繰り返した場合、終末技の難度は不認定となる。
15. 前方宙返り3回ひねり（シライ2）：F難度 p57II-48
16. 前方かかえ込み2回宙返り1回ひねり：E 難度 p57 II-59
17. 後方宙返り4回ひねり（シライ-グエン）：F 難度 p59III-36

2) 演技実施上の確認事項

1. すべての力技(力倒立類を含む)は静止が必要であり、静止時間が2秒に満たない場合は-0.30、静止が見られない場合は-0.50の減点となる。
2. ロシアン転向技で反り身の目立つ姿勢は減点(-0.10)。
3. ~~「倒立から伸膝前転脚前挙支持経過倒立(2秒) I-45」において、脚を抜いて倒立になる際に開脚した場合は無価値な開脚として中欠点(-0.30)となる。~~
⇒「倒立から伸膝前転脚前挙支持経過倒立(2秒) I-45」において、脚を抜いて倒立に達する過程で開脚しても減点の対象としない。
4. 十字倒立への経過で、速いリズムで倒立に持ち込む捌きの減点(-0.10)。
5. 脚上挙支持は、上半身と脚部に開きがあるような捌きは柔軟性に欠ける減点の対象となる(-0.10、-0.30)。マンナは、脚部の裏側が水平で減点なしとなり、第9-2条8項に則って角度の減点がなされる($<15^\circ$: -0.10、 $<30^\circ$: -0.30)。
6. タンブリング間の動き・コレオグラフの工夫は演技の持ち味となるが、無味乾燥とした動き、コーナーでの単純な場所取りや方向転換、アクロバット技の前の長すぎる停滞(2秒以上)は減点となる。宙返りの着地後すぐにコーナーなどへ移動する捌きは、安定した着地をとることができる実施を前提とし、不安定な着地姿勢からの移動は実施減点となる(-0.10、-0.30)。
7. コーナーへの単純なステップや移動は、0.10の減点(良い動きで少なくとも 180° のターンが含まれなければならない)。宙返りの着地後にジャンプをして伏せる捌きは、安定した着地をとることができる実施を前提とし、ジャンプをする際は垂直方向への上昇を示してから正面支持臥にならなければならない。不安定な着地から前に倒れ込むようなジャンプは大欠点となる。
8. アクロバット技の連続で安定した着地を示しても高さ(浮き)がない場合、実施減点となる。
9. アクロバット技のやや高さがない実施の減点(-0.10)。
10. かかえ込み宙返りにおいて不明瞭なかかえ込み姿勢は実施減点となる。
11. アクロバット技の連続でひねり不足が明らかな場合の減点(-0.30)。
12. 宙返り転技の高さ不足の減点(-0.10)。支持局面で、手の甲で転になる実施の減点(-0.30)。
13. 宙返り転技は、転の前に身体の伸ばしが要求される。体をまげたまま転になる捌きは小・中欠点である。また、宙返りの回転不足等で危険を感じるような実施は大欠点(-0.50)となる。
14. 宙返り転技で転がった後、スムーズに直立できないことに対する減点(-0.30、-0.50)。
15. トーマス等のひねりを伴う宙返り転技で、ひねり不足により半分の状態で転がった場合の減点(-1.00 : 半身での転、-0.30 : ひねり不足、-0.10 : 技術欠点)。
16. 転や正面支持臥になる技を、2回を超えて実施した場合、3回目からE審判による減点となる(毎回-0.30)。同一技を2回実施した場合でも2種類実施の場合と同様に、3回目から減点の対象となる。小さくとんで正面支持臥になる捌きや幅をとるための小さなとび前転もこの対象となる。
17. 同一対角線の使用については、同じ対角線を連続して3回以上、何回連続で使用しても0.30の減点となる。その後、別の対角線で更に3回連続の使用があった場合、あらたに0.30の減点が発生する。
18. 同一対角線の使用については、アクロバットシリーズの間に力技や旋回技などを実施しても、対角線の変更をしなければカウントは継続される。
19. 四辺の中間点に目印は置かない。(P41 c ゆかの全ての辺に、目安として中間点に印をつける。
⇒削除)

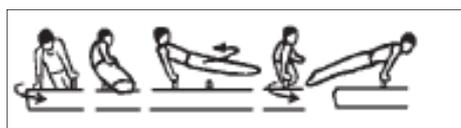
□ あん馬

1) 難度認定上の確認事項

1. グループ I の倒立を経過する交差技は演技中 2 回まで認められる。この規則は旋回技を基本とする種目の特性が損なわれることを避けるためである。
2. マジャーレ～外向き旋回～シバド移動を実施する場合の外向き旋回は、馬端外向き正面支持からカウントし正面支持までで A 難度を認定する。



3. グループ II の旋回倒立から下ろす技で明らかな力の使用や停滞は、難度不認定となる。
4. 旋回倒立から旋回、支持になる技で落下した場合は、難度不認定となる。
5. 旋回倒立の格上げの原則は次の通り
 - ①旋回倒立で「360° ひねる」……………1 段階の格上げ
 - ②旋回倒立で「3/3 移動と 270° のひねりを伴う」……………1 段階の格上げ
 - ③旋回倒立から「下ろして旋回を回す」……………1 段階の格上げ
 - ④旋回倒立から「360° ひねり後下ろして旋回を回す」 ……2 段階の格上げ (①と合計し 3 段階)
6. グループ II の旋回倒立から下ろす技 (旋回や開脚支持) は演技中 2 回まで認められる。
7. 一把手上縦向き支持からあん部馬背へ移動しながら旋回1回ひねり：E 難度 (II-35 と同一枠)
8. 一演技中、縦向きでの 3 部分移動は、前移動 1 回、後ろ移動 1 回のみ認定される。マジャーレ移動 (D) の後に縦向き前移動 3/3 (馬端—把手—把手—馬端：C) を実施しても難度不認定となる。
9. 縦向き前移動の終了局面は縦向き正面支持である。マジャーレ移動の終末局面で横向き背面支持 (入れて横向き背面支持) になるような場合は縦向きの 3 部分移動と判定せず 2 部分 (B 難度) とする。
10. 馬端中向き縦向き正面支持から前移動 1/3～一把手上縦向き旋回をする場合、一把手上への移動後正面支持までを前移動 (A 難度) と認定し、正面支持から次の縦向き旋回を数える。
11. 縦向きとび前移動3/3 (III-47：ドリッグス) は、明確なとびの後両手同時正面支持を示した場合 E 難度と判定し、それ以外は D 難度 (III-46：マジャーレ移動) とする。
12. 他に記載されていない限り、すべての旋回技の開始と終了は正面支持である。下向き転向 (フクガ) やショーで背面支持から片足振動技に繋がった場合、難度不認定となる。
13. 馬端部横向き支持から 1/4 転向しながら一把手上に縦向き正面支持になり縦向き支持の技に連続されるとループと判定し、一把手上の縦向き正面支持から 1/4 転向し横向き支持になるとシュテクリ B と判定する。



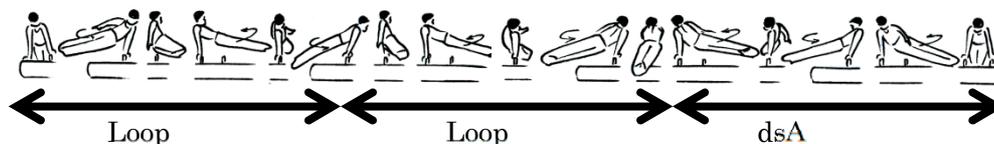
ループ



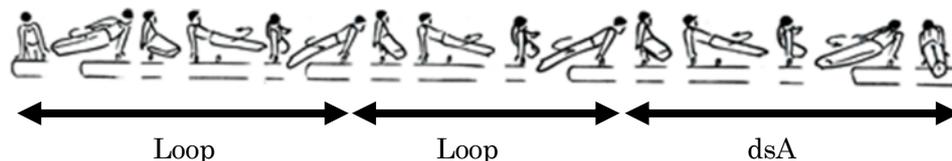
シュテクリ B

14. 一把手上縦向き旋回連続+dsA はフロップ技となり D 難度で認定する。下記の 2 例はいずれも D 難度となる。

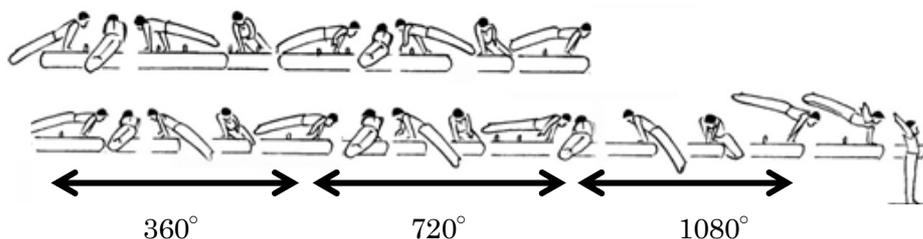
例①



例②



15. フロップやコンバインで落下した場合、落下までに成立した部分の難度を認定する。ただし、明確な正面支持を示した場合に限る。コンバインでは一把手上で手の握り換えが終了した時点を正面支持とする。
16. ロシアン転向技は、把手上および馬背上において終末技を含めて最大 2 回まで実施することができる。この条項に関しては、終末技を一番目に数え、ベスト 9 に含まれないロシアン 180° 転向 (IV-55) も含め出現順にカウントされる。ロシアン転向技のカウントに、コンバイン、ウ・グオニアン、ロス、**トンフェイ (IV-33、34)**、**クロル、IV-69** は含まれない。
17. シバド移動からロシアン転向技を実施する際、縦向き正面支持を示す前に転向を開始した場合、シバド移動 (D 難度) は成立しロシアン転向の開始は横向き正面支持となる。
18. ウ・グオニアンの途中で落下または停止した場合、難度は不認定となる。3/3 移動後に明確な正面支持が認められた後に落下した場合、難度は認定される。
19. ウ・グオニアンは、あん部馬背支持に達するまでに 360°の転向を完了し、残りの 360°の転向を馬端馬背支持に達するまでに完了しなければならない。3 部分移動が完了した時点で 360°を転向し、続けて馬端馬背支持で 360°の転向をするような捌きは 2 技と見なす (ロス+ロシアン 360°転向)。
20. ロシアン転向技の途中で落下した場合、落下までの転向度数分の難度を認定する。ただし、明確な正面支持が認められた部分までとなる。
21. 倒立位を経過する交差技や終末技において、倒立への上昇局面で明らかに足先が下がった場合、難度は不認定となる。
22. 馬端外向き縦向き正面支持から開始されるロシアン転向下りは、転向した度数をすべて含めて数えるものとする。下図のようにウ・グオニアンから実施されたロシアン転向下りは、馬端外向き正面支持から開始となりロシアン 1080° が成立し D 難度が認定される。



23. ロシアン転向下りで途中落下した場合、常に下記の通りに難度認定される。D 審判が終末技で落下したと判断した場合、ロシアン転向下りの難度とグループ V は認定されない。E 審判は通常の落下+実施減点を適用する。

例) ロシアン 1080° 転向下りを実施しようとした途中経過においてロシアン 900° 転向を完了して落下した場合、C 難度 (グループ IV) を認定する。選手はロシアン転向下りの難度とグループ V を獲得できない。このような場合、選手は難度とグループ V を確保するため、再度、ロシアン転向下りをする事が認められる。

24. 倒立を経過する終末技は、1回にかぎりやり直すことが認められる。ただし、落下減点(−1.00)と実施減点を伴う。
25. 終末技は旋回技から実施しなければならない。片足振動技や不十分な旋回技からの倒立は終末技として認定しない。
26. 終末技の450°以上と表記されているのは、倒立下りで着地をする際90°の転向を行うためであり、 $360^{\circ} + 90^{\circ} = 450^{\circ}$ と考える。
27. 倒立下りの3部分移動と360°ひねりは、移動しながらひねっても、移動する前や後にひねっても難度は認定される。
28. 倒立を経過する終末技で移動やひねりが含まれた場合、馬体を越えなくても技の成立した部分まで難度を認定する。

例) dsA 倒立 3部分移動 1回ひねり下り (E 難度) で、3部分移動後1回ひねりの途中で中断した場合、dsA 倒立 3部分移動 (D 難度) まで認定とする。

29. 横向き(開脚) 旋回1回移動ひねり(2回以内の旋回で他の位置へ移動し再び戻る) : E 難度 p77 II-29 (追加)



30. 両把手を挟んで(開脚) 旋回1回ひねり(2回以内の旋回で) : F 難度 p77 II-30 (技番号の変更 p77 II-29を削除)

31. 縦向き1/3 移動ひねり : B 難度 p80 III-26 (追加)



32. 縦向き(1/2 or 2/3) 前(後ろ) 移動ひねり : C 難度 p80 III-27 (追加)

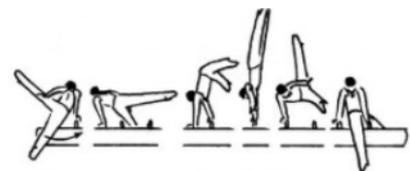


33. 正面(背面) 横移動ひねり、背面(正面) 横移動ひねり(馬端~馬端) : E 難度 p81 III-29 (技番号の変更 III-28とIII-34がIII-29の同一枠に統合 p81 III-28、p81 III-34を削除)

34. 縦向き1/3 前移動1/4 ひねり : B 難度 p80 III-32 (技番号の変更 p82 III-50を削除)

縦向き1/3 後移動1/4 ひねり : B 難度

35. 正交差ひねり倒立横移動しながらひねり開脚支持(ステパンヤン) : C 難度



36. 縦向き 1/3 前移動直ちに 2/3 縦向き移動ひねり(ニンレイズ) : D 難度

* 第11-2条2i)項、縦向き 3/3 移動は一演技中2回までの条項に抵触



37. 下向き転向下り(V-01) ⇒ (開脚) 旋回から下向き転向下り

2) 演技実施上の確認事項

1. 交差技以外の片足振動技においても大きさのない実施は減点（-0.10、-0.30）。
2. とび交差技についても、高さの減点は交差技と同様に扱う。とび交差技および交差倒立技において、両脚で馬体を挟んだり、臀部がついた場合は、器械上への落下とする。
3. 片足振動技で開始する際の余分な予備振動は-0.30の減点となる。半振動は認められる。



減点無し

-0.30

4. 倒立を経過する交差技は振動で実施されるべきであり、腰をまげて倒立位になるような捌きは、腰のまがり（-0.30）および力の使用（-0.30）と2つの項目で減点の対象となる。
また、倒立で足を閉じない場合は、-0.30の減点となる。
5. 倒立位を経過する技で倒立への上昇局面で足先が下がった場合は、-0.50の減点となる。
6. 旋回や開脚旋回の大きさに欠ける減点については、E審判は身体が十分に伸びていない実施に対して演技全体の減点（-0.30、-0.50）として対応する。一技における腰のまがり技術欠点として減点される。
7. 縦向き移動技で移動した後の終末局面で向きが不正確な実施は減点の対象である。
8. 縦向き移動技の向きの逸脱や着手位置のずれは旋回（一部分移動）ごとに減点の対象である。
9. フロップ技は一技ごとに減点の対象である。
10. 旋回技において馬体に触れる（当たる）実施は毎回減点となる（触れる-0.10、ぶつかる-0.50）。
11. ~~交差倒立は、下ろす際に足の入れ換えを行い逆入れ支持にならなくてはならない。~~
⇒従来通りで変更なし

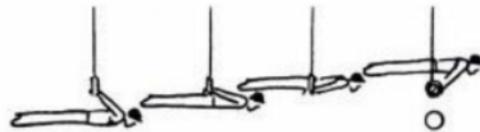
□ つり輪

1) 難度認定の確認事項

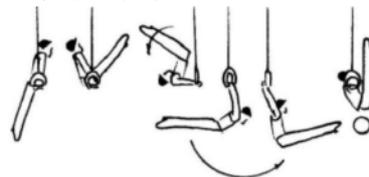
1. 10cm厚の着地マットの使用は認められない（高等学校適用規則は除く）。
2. ジョナサン（屈身ヤマワキ）やヤマワキ（かかえ込み）で支持が見えた場合、難度は不認定となる（ジョナサンで支持が見える≠ホンマ+支持後ろ振り前に回りながら懸垂）。
3. 支持後振り、前に回りながら懸垂（I-07：A 難度）は、支持後振りを示すべきで開脚前拳支持や水平支持から前に倒れて懸垂後ろ振りは難度を認定しない。
4. 振動からの力静止技は、融合した動きで静止技に持ち込まなければならない。輪の高さで前方宙返り十字懸垂（ホンマ十字懸垂）やけ上がり十字懸垂は、肩が上がりすぎてから(45°<)終末姿勢に持ち込んだ場合は2つの技として判定する。
5. グループⅢおよびⅣの技は直接3技まで連続することができる。4つ目以降はD審判によって難度が認定されない。
6. グループⅢとⅣの技が連続していないとするためには、最低B難度以上の振動技が必要である。ただし、け上がり脚前拳支持（I-56）、後方け上がり支持（I-62）、後方伸身支持回転倒立（II-02）は「B難度以上の振動技」というこの条件から除外される。

- 例) ①振り上がり開脚水平支持・・・C (Ⅲ)
 ②十字懸垂・・・・・・・・・・B (Ⅳ)
 ③逆上がり・・・・・・・・・・A (Ⅰ)
 ④脚前拳支持・・・・・・・・・・A (Ⅳ)
 ⑤屈腕伸身力倒立・・・・・・・・B (Ⅳ) 不認定

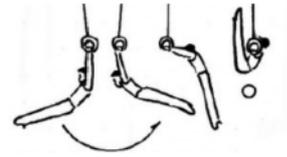
7. 中水平支持は、輪の高さで身体を水平で一直線に保持しなければならない。肩の大半が輪の上端より上にあった場合、水平支持と判定する。
8. アザリアンやヤン・ミンヨン（後方伸腕伸身逆上がり水平支持）は、伸身姿勢での後転が前提であり、腰のまがりは実施減点となる。明らかに反動を利用した場合、グループⅢの技となる。
9. ピネダ（正面水平懸垂経過十字懸垂）、バブサー（正面水平懸垂経過中水平支持）は伸腕が前提であり肘のまがりは実施減点となる。極端にまがる実施は難度を認定しない。また、正面水平懸垂（経過）は、正確な姿勢を表現し反動や振動を使わないで実施しなければならない。
10. ナカヤマについては、背面水平懸垂姿勢を経過し、ゆっくり捌かなければならない。明確に背面水平懸垂まで下ろさないものは単なる十字懸垂（B 難度）と判定する。また、反動を使うような捌きは D 難度として認定しない。
11. 脚前拳十字懸垂から伸腕伸身中水平支持や伸腕伸身十字倒立は、一度腰を伸ばしてから中水平支持や十字倒立に捌くことが前提である。腰をまげたまま肩を前に出す捌きは、屈身（D 難度）で判定する。
12. 水平支持（水平支持と開脚水平支持）は、一演技中 2 回まで価値を認定する。出現順に 3 回目は認められない。
13. 十字懸垂（十字懸垂、脚前拳十字懸垂、脚上拳十字懸垂）は、一演技中 2 回まで価値を認定する。出現順に 3 回目は認められない。
 例) け上がり脚上拳十字懸垂・・・・・・・・D 難度
 ホンマ十字懸垂・・・・・・・・・・D 難度
 アザリアン・・・・・・・・・・不認定
14. ~~後方屈身 2 回宙返り 1 回ひねり下りは、D 難度と判定し伸身姿勢からの逸脱の減点を伴う。~~
~~p110 V-30 後方かかえ込み（屈身 or 伸・屈 or 屈・伸）2 回宙返り 1 回ひねりの括弧内を削除。~~
 ⇒従来通りで変更なし
15. 前方屈身 2 回宙返り 3/2 (1 回) ひねり下り : E 難度 p117 V-17 (追加)
16. 前方かかえ込み 2 回宙返り 3/2 (1 回) ひねり下り : D 難度 (p117 V-10 追加)
17. 背面水平懸垂から引き上げ水平支持 (2 秒 ザネッティ) : F 難度 (Ⅳ-72 と同一技番号)
 *背面水平懸垂で静止が求められる。



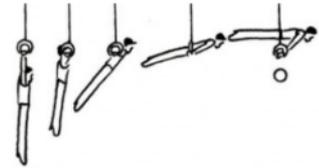
18. 輪の高さで前方宙返り直接脚上拳十字懸垂 (2 秒) : E 難度 (Ⅲ)
19. リーニン 2 直接脚上拳十字懸垂 (2 秒 ツカハラ) : E 難度 (Ⅲ)



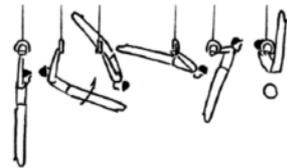
20. 後ろ振り上がり脚上挙十字懸垂 (2秒 カトウ) : D 難度 (Ⅲ)



21. 懸垂から伸腕伸身水平支持 (2秒 バランディン3) : E 難度 (Ⅳ-53)

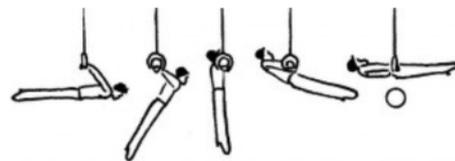


22. 伸腕伸身逆上がり脚上挙十字懸垂 (2秒 タイ) : E 難度 (Ⅳ)

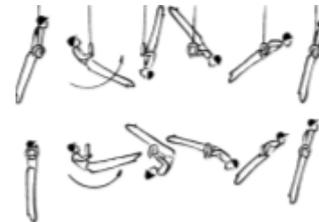


23. 背面水平懸垂経過伸腕伸身引き上げ上向き中水平支持 (2秒 ザフラン) : F 難度 (Ⅳ)

*技の過程でいかなる部分においても支持局面が見られた場合は、不認定で減点の対象となる。



24. 採点規則 p100 屈身 (伸身) 逆上がり支持 (I-73) の挿図を差し換える。



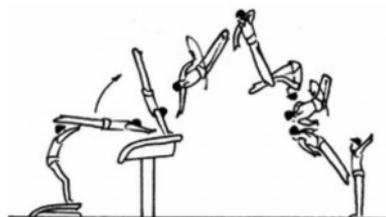
2) 演技実施上の確認事項

1. 輪 (ケーブル) の揺れやゆがみは、1 技毎に -0.10 の減点となる。
2. 後方車輪 (ほん転逆上がり) 倒立経過において、腕が完全に揃っていない捌きや倒立位を経過していない場合の減点 (-0.10、-0.30)。
3. ヤマワキやジョナサンで回転速度が遅い、または大きさが無い場合の減点 (-0.10、-0.30)。
4. ヤマワキやジョナサンの回転途中に支持がみられた場合 (止まりかけて前ロールをするような捌き) の減点 (-0.50)。
5. 十字倒立で、頭頂部が輪よりも高いような実施の減点 (-0.50)。
6. 十字倒立で反った捌きに対する減点 (-0.10)。
7. 中水平支持や開脚水平支持で、肩が静止していても足先が揺れていたり、全体的にジワジワと動いているような実施では静止は認められず、全く静止していない減点 (-0.50) に抵触する。
8. 屈腕伸身力倒立で振動を使った場合の減点 (-0.10、-0.30)。
9. 伸腕屈身力倒立で肘がまがった場合、腕のまがりの減点、(-0.10、-0.30) とロープに触れる減点 (-0.30) となる。
10. 脚上挙支持や脚上挙十字懸垂は、上半身と脚部に開きがあるような捌きは柔軟性に欠ける減点の対象となる (-0.10、-0.30)。また、脚部は垂直でなければならない。
11. 逆懸垂姿勢での 2 秒以上の静止を減点対象とする。毎回減点 (-0.10)

12. アザリアンや逆懸垂になる際の余分な肘まげは減点の対象とする。
13. 演技開始の懸垂で正しい姿勢から逸脱（肩転位や輪を開いた状態）が見られる場合は、減点の対象とする。

□ 跳 馬

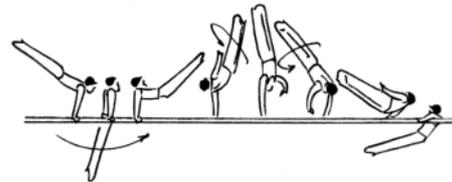
- 1) 難度および演技実施上の確認事項
 1. 種目別予選及び決勝において、得点の算出方法は第一跳越と第二跳越の平均を得点とする。
 2. 高さ不足（上昇局面のみられない実施）は以下の基準とする。
 - ① 減点なし＝感動する程の高さ
 - ② 小欠点＝浮いたと感じる程度
 - ③ 中欠点＝浮きがみられない
 - ④ 大欠点＝低いと感じる
 3. ロペスやローチェであっても準備局面のみられない着地は減点となる（-0.10、-0.30）。
 4. 着地位置が低い実施は減点の対象である。
 5. 着地一步の踏み出しで、肩幅以上は中欠点である。
 6. 着地が止まっても脚が開いたままやずれている場合は減点の対象である。
 7. 軸ぶれやひねり不足による横方向への一步は、さらなる減点の可能性はある。
 8. 伸身コルチェンコとび3回ひねり：6.0（シライ - キム・ヒフン #326）
 9. 前転とび1回ひねり前方屈身宙返りひねり：5.2（アリカン #127）



□ 平行棒

- 1) 難度認定の確認事項
 1. 屈身バーレは、最初の後方宙返りから明確な屈身姿勢を示さなければならない。懸垂から宙返りになる際に膝のまがるものや屈身の不明確な実施（屈身になるのが遅い）は、かかえ込みと判定する。
 2. 棒下宙返りひねり倒立において単棒上で明らかな停止をするような実施は、難度不認定とする。
 3. 棒下宙返りひねり倒立で倒立の角度が低い実施（45°未満）をした場合、明らかな過失として難度不認定とし、棒下振り出しひねり支持（C 難度）としては判定しない。棒下振り出しひねり支持を実施する場合は、意図を明確に表現しなければならない。
 4. 棒下宙返り倒立で肘がまがっても上昇運動に停滞がなければ難度を認定する。しかし、上昇中に停滞する実施や肩が一度下がるような実施は難度不認定となる。
 5. シャルロ（棒下宙返り単棒縦向き倒立）：E 難度（1秒以上の静止）
ピラスキー（後方車輪単棒縦向き倒立）：D 難度（1秒以上の静止）
静止が1秒未満でも静止が認められた場合、難度を認定する。
静止することが不可能な瞬時倒立では難度不認定となる。

6. 開脚抜き倒立技（チップルト等）で脚がバーにのった場合、難度不認定となる（器械上への落下）。また、開脚支持で明らかに停止する実施や上昇時に足先が一端下がり再び上げた場合、難度不認定となる。
7. 懸垂前振り上がり開脚抜き、伸身かつ水平位で懸垂：E難度（Ⅲ-05：バブサー）
 - * この技の後に連続された技は独立した難度を有する。後方車輪やモイであればE+C、ベレーであればE+D等
8. **ディアミドフひねり腕支持：C難度（Ⅰ-15 サラザール）**
 - * 2003年世界選手権にてManuel SALAZAR（MEX）が発表



2) 演技実施上の確認事項

1. 振動から倒立位を経過する技は、15°未満の角度逸脱であっても減点（-0.10）となる。
2. 静止技として難度が認定されるためには2秒保持しなくてはならない。
脚前拳支持や後ろ振り倒立で2秒静止がない場合の減点（-0.30）。
3. 支持から腕支持前方ローリングをした場合の減点（-0.30）。
4. モリスエやベレーの高さ不足の減点（-0.10、-0.30）。
5. モリスエやベレーは浮きの表現とともに、腕支持になる前に身体や膝をよく伸ばさなければならない。
宙返りでかかえ込んだまま腕支持になった場合の減点（-0.10、-0.30）。
回転の途中でぶつかるように腕支持になる減点（-0.50）。
6. モリスエやベレーでバーを持った瞬間の姿勢不良の減点。
7. ベレー、モイ、車輪系の技で足先がマットに触れた場合（-0.10）、マットに明らかにぶつかった場合（-0.50）の減点となる。
8. ベレーや宙返り系の技の終末局面において、バーを正確に握らない、または遅い握り、上腕部のみで支持しながら前振りになるような捌きに対する減点（-0.30）。
9. バブサーは、懸垂時に身体が伸身かつ水平でなければならない。
水平位からの角度逸脱の減点は、15°まで-0.10 30°まで-0.30
10. 棒下宙返り倒立系の技は伸腕での実施が前提である。肘がわずかにゆるむものは減点となる。
肘がまがった場合の減点（-0.10、-0.30）。
肘が深くまがった場合の減点（-0.50）。
11. シャルロやピアスキーは、単棒倒立で1秒静止が必要となる。
静止時間（1秒未満）：-0.30
瞬時単棒縦向き倒立：-0.50（難度不認定）
12. シャルロやピアスキーで縦向き単棒倒立で正対を示さない場合、縦向きの角度の逸脱も減点の対象とする（-0.10、-0.30）。**握り手を前後にずらしたことによるわずかなゆがみ（右図参照）は減点の対象とはならない。身体の向きの逸脱は減点の対象となる。過度の逸脱は難度不認定となる。**
13. 単棒横向き前方浮腰上がり脚前拳支持経過横向き倒立で、足先がバーに触れた場合の減点（-0.10）。
14. チップルトで脚がバーにのった場合、器械上への落下となり減点（-1.00）。
15. 終末技で着地を止めても着地前に身体を伸ばす局面がみられない減点（-0.10）。



16. ウォームアップ時間は、個人一人に対し 50 秒、チームに対し 50 秒×人数分が与えられる。それらにはバーの調整やマグネシウムをぬる時間も含まれる（終了のコールと同時に始めた運動は認められる）。時間オーバーした場合は決定点から 0.30 の減点（ニュートラルディダクション：ND）となる。

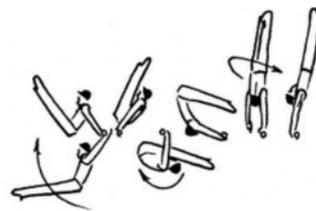
計時審判のコールはアップ開始の「スタート」、個人の場合は「40 秒」、「50 秒（終了）」、チームの場合は「30 秒前」、「10 秒前」、「終了」とする。運営上可能であればタイマーを設置する。

□ 鉄 棒

1) 難度認定上の確認事項

1. 片手懸垂になる技はバーの下を最大 2 回まで通過することが認められる。
2. ひねりを伴う技は握り方が違う同じ技（例：リバルコと後方とび車輪 3/2 ひねり片大逆手）を行うことはできない。
3. 手放し技の認定は明確な懸垂姿勢を示した場合に限られる。懸垂後の前(後ろ)振りで落下した場合、不認定となる。
4. 伸身トカチェフは、明らかな腰のまがり (90°) が見えた場合 C 難度とする。
5. ヤマワキ (II-10) は、上昇の仕方、腰のまがり具合、下向き転向の度合いを総合的に判断する。明らかな腰のまがりや下向き転向が見えた場合、ポローニン (B 難度) と判定する。
6. モズニク等で、懸垂後に後ろ振り倒立または手放し技へ連続出来なかった場合や腕を交差しただけの実施はトカチェフ (伸身または開脚) と判定する。
7. 屈身回転やとび車輪でひねりを伴う技において、水平より高い位置で技を完了しない捌きは難度不認定になる。
8. 屈身回転やひねりを伴う技の途中での停滞、とびひねり技でとびが見られない握り換えは難度を分割する。
9. 肩を半転位した状態での逆手背面車輪は大逆手車輪 (B 難度) と判定する。
10. 大逆手車輪 (B 難度) は、以下のような連続で大逆手車輪 (B 難度) を認定することができる。
例) アドラー (C) ~大逆手振り上がり (大逆手車輪：B) ~大逆手エンドー (C)
リバルコ (D) ~大逆手振り上がり (大逆手車輪：B) ~大逆手エンドー (C)
11. また、以下のような連続で大逆手車輪 (B 難度) は、認定されない
例) アドラー (C) ~大逆手振り上がり逆手持ち換え (難度なし)
リバルコ (D) ~大逆手振り上がり逆手持ち換え (難度なし)
12. 15-2 条 2-3-7. のアドラー系は 2 回まで実施できるという条項において以下のように判定する。
例) ①アドラー・・・・・・45° 未満で不認定
②アドラーひねり・・・・・・D 難度
③アドラー1回ひねり・・・・3 回目でも不認定 (E 審判：-0.30)
例) ①アドラー (落下による不認定)
②アドラー・・・・・・C 難度
③アドラーひねり・・・・・・D 難度
13. 大逆手エンドーの成立は、終末局面である倒立位から 45° 以内や早めに逆手に持ち換えて前方車輪につながるような捌きであれば難度認定される。また、倒立に上がらないで順手に持ち換えて後方車輪に繋がるような実施では不認定となる。
14. 伸身で行う技は全経過伸身姿勢を示さなければならず、途中で屈身やかかえ込み姿勢がみられた場合、低い難度で判定する。後方伸身 2 回宙返り 2 回ひねり下りにおいて、後半に膝をまげるような実施は、かかえ込みと判定し D 難度とする。

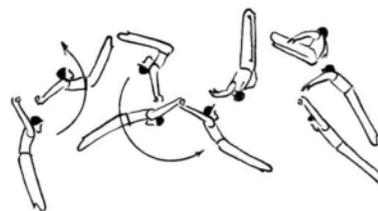
15. 開脚モズニク（リンチ）：D難度 p181 II-22 (p181 II-17の括弧内から移動)
16. シャオ・ルイチ：D難度 p183 II-46 (p181 II-22から技番号の変更)
17. シュタルダーとび1回ひねり大逆手：D難度 p189 III-46 (p189 III-40から技番号の変更)
18. シュタルダーとび3/2ひねり片大逆手：D難度 p189 III-40(p189 III-46から技番号の変更)
19. 順手背面懸垂振り上がり後方浮腰回転倒立ひねり大逆手：D難度 (IV-46 リホヴィツキー)



20. 屈身ゲイロードひねり懸垂：F難度 (II-60 マラス)
*2007年ヨーロッパ選手権にて Vlasios Maras (GRE)
が発表



21. 順手背面懸垂からギンガー：C難度 (II-69 サプロネンコ)
*1997年世界選手権にて Yevgeny Sapronenko (LAT)
が発表ギンガーと同一枠



2) 演技実施上の確認事項

1. 車輪での単純な横への手のずらし（片手も含め）は減点（-0.10）。
2. ひねりを伴う技はひねり終わってバーを握った時点の角度で判断をする。
3. ~~後方とび車輪1回ひねりで片手ずつ握るような実施は減点。~~
⇒ひねりが完了し片手ずつ握る実施では減点はない。不完全なひねりで片手ずつ握るような実施は、減点の対象となる（-0.10、-0.30）。
4. 手放し技は、バーを握る前に身体をよく伸ばさなければならない。身体の伸ばしが不十分な捌きや、膝のまがった実施、身体が歪んだまま懸垂になるものは減点となる。
5. 屈身回転ひねり系の技において、ひねりの前に屈身倒立で停滞するような実施は減点であり、そのうえ分割した難度認定の可能性もある。屈身回転倒立の上昇中にひねりが始まらない場合、減点となる。片大逆手になる技で高い位置でバーを握ってもひねりが完了していない実施は減点となる。
6. 終末技や手放し技の前の車輪での膝まがりは減点となる。
7. 終末技や手放し技の前の車輪の倒立位からの外れに対する減点はない。
8. ヤマワキ（II-10）は、伸身で身体が垂直にバーを越えなければならない。バーを越える際の過度の腰の曲がりや不完全な実施は減点の対象となる。

6. 2014 年度内規

以下に示す競技会以外の大会で適用する。

- ・第 68 回全日本体操競技選手権大会（個人総合選手権、種目別選手権、団体選手権）
- ・第 53 回 NHK 杯体操
- ・2014 全日本ジュニア体操競技選手権大会（1 部）
- ・第 68 回全日本学生体操競技選手権大会
- ・全日本社会人体操競技選手権大会（1 部）

1) 終末技グループの要求難度について

- ・A難度の終末技 +0.10
- ・B難度の終末技 +0.20

2) 下記の宙返り下りはA難度とする

- ・つり輪、平行棒、鉄棒の前方・後方（かかえ込み・屈身・伸身）宙返り下り

7 終わりに

審判委員会
男子体操競技審判本部
本部長 後藤 洋一

2013 年 9 月にブエノスアイレスで開催された IOC 総会において 2020 年五輪の開催都市が東京に決定しました。2011 年の東日本大震災から 1 年半が経過し、日本にとって復興に向けて大きな励みとなることともに我々体操人にとっても大きな目標が掲げられました。現役選手はもとよりジュニア世代の選手も大舞台での活躍を目指して精進していただきたいと思ひます。

2013 世界選手権アントワープ大会では、内村航平選手が個人総合四連覇を達成するとともに種目別決勝において、ゆかで白井健三選手、あん馬で亀山耕平選手、平行棒で内村航平選手が金メダルを獲得しました。1 大会で 4 つの金メダル獲得は、1978 年ストラスブール大会以来の快挙でありました。また、7 月にロシアのカザンで開催されたユニバーシアード大会では、加藤凌平選手（順天堂大学）が種目別ゆかで、10 月に中国の天津で開催された東アジア競技大会で田中佑典選手（コナミ）が種目別鉄棒で金メダルを獲得するなど、各大会でも一定の結果を残すことができました。出場した選手はもとより、コーチやトレーナーの方々を含め派遣された選手団に敬意を表したいと思ひます。

昨年来よりローテーション時の挨拶は、主任審判（D1）の前に整列をすることをお願いし、多くの監督・選手にご理解をいただけたこと、演技以外の行動や振る舞いまで気を配っていただいたことに感謝いたします。マナーアップという観点から来年度は以下の点にもご注意くださいと思ひます。

- ① 着地の際のガッツポーズ
- ② 平行棒の調整とマグネシウムの使用方法
- ③ ローテーション時の整列
- ④ 採点間や待機時（ウォームアップ時以外）のマット上での練習
- ⑤ 頭髪や服装
- ⑥ 携帯機器の使用

①は、着地をした後、両手を拳上しポーズをとる前にガッツポーズをする選手を見受けます。自己の演技に高揚しガッツポーズをとることは構いませんが演技の終了を示すポーズと礼をするまで演技の一部であることを認識していただきたいと思います。②は、跳馬の演技終了後バッグを持ちチームの大半の選手が平行棒まで移動し器具の調整を始めることや、選手が着地のポーズをとっている最中に次の選手やコーチがマット上に上がって準備を始めるケースがありました。③は、ローテーションで早く移動したチームが整列をして待つことなく器具やプロテクターの調整をしている選手がいました。また、平行棒の準備の際マグネシウムをばら撒くように使いマットを白く汚し霧吹きや雑巾も散在しています。④は、狭い競技会場などで選手席がマットに近い場合、マット上で柔軟運動や倒立をする選手がいました。⑤は、体操競技は美を競うスポーツです。身だしなみから日本の選手は美しいと評されることを期待します。⑥は、携帯機器の使用はアリーナ内での使用は禁止されています。

国内大会におきましても、器械の周りは五輪や世界大会におけるポディウムと同じと考えています。選手、コーチ、審判員は、ローテーションや競技を待つ間を含めてアリーナ内での行動にもご注意くださいと存じます。リオデジャネイロ五輪や東京五輪で団体金メダルを目指すためにも関係者一丸となって些細なところから改善されることを期待します。

2014年に向けて、審判の皆さんには採点技術の更なる研鑽をお願いします。常に新しい情報を入手し現場に活用できるよう準備をしてください。2013年版採点規則が適用され1年が過ぎました。しかしながら、この1年間でいくつかの変更点が公開されました。国内に向けて発表したこの情報を十分に掌握され選手の評価にあたっていただきたくようお願いします。また、様々な通信機器によるSNS（ツイッターやフェイスブックなど）によって様々な情報が氾濫しています。選手に関することはもとより規則に関する情報など公的ではない内容も見受けられます。そのような情報に惑わされることないようにするとともに発信源にならないようご配慮いただきたいと存じます。

最後に、今大会はリオデジャネイロ五輪と6年後の東京五輪へ向けての素晴らしいスタートとなる一年となることを期待します。

おわり